完全復旧なった『カティサーク』

TN6　高島　健

19世紀後半、帆船時代の最後を飾る快速船として活躍した『カティサーク』が、ロンドンのテームズ河畔グリニッチで展示船として一般公開されていることは、皆さんもご存知のことと思う。

2007年５月21日早朝、折から大規模な補修、改装工事中であったこの船の船体中央部付近で火災が発生、鉄製のフレームを残して外板等の木造構造物の多くが消滅するという事故が起こった。出火当時は、改装工事中ということで、マストやヤード、その他、船内に飾ってあった船首像をはじめとした多くの展示品、備品類は既に陸揚げされ、他の場所で保管・補修中であったため、災害を免れたのは不幸中の幸いであった。

事故直後のカティサーク財団のリチャード・ダウティ主席執行役員の談話では、火勢によりどの程度鉄骨類に影響を及ぼしているかが心配である、ということであったが、その後の調査で、骨組みはそのまま使用可能という結論に達し、速やかに復元工事が再開され、５年後の2012年４月25日、見事に昔の姿を取り戻し、エリザベス女王によって一般公開が宣言され現在に至っている。

当初の計画では、補修・改装に掛かる総工事費は約2,500万ポンド（邦貨約40億円）、工期は約２年であったが、火災による損害のため、追加に要した費用は、500万～1,000万ポンド（約８～16億円）であったということである。

全 景
マスト、ヤード、その他の艤装類は完全に昔の姿を取り戻しているが、ほぼ喫水線から下の部分は、全周にわたってドックの縁までを温室様のガラスの囲いで囲われ、所謂快速帆船としてイメージされるシャープな船体が隠されてしまったのは残念である。

なお、これらの資金については、事故直後から各種団体や一般個人から続々と寄付金が寄せられ賄われたということで、さすが海運王国を誇る英国ならではと感心するとともに、我が明治丸の現状と比較し、羨ましく感じたことであった。

過日、英国に行く機会を得、ロンドン、サザンプトンを訪問した際、本船をつぶさに見学することが出来たので、写真をもとに紹介しようと思う。

▲　左舷後方より
写真右下、船尾付近に船内への入場入口がある。本船の周囲は如何にも海運の原点という落ち着いた雰囲気。

▲　船首付近を拡大
バウスピリット下にカティサークのシンボルである船首像「ナニー」が見える。

▲　右舷後方より
右にある建屋は船外に取り付けられたエレベーターハウス。外部に直接通じる出入口はなく船内からの渡し廊下で利用する。

▲　船首像たち
ドックの最奥部には、以前は本船の船倉内の両サイドに飾られていた船首像たちが、カティサークの「ナニー」を頂点にして勢揃いしている。

▲　船尾から見た本船とドック内風景
今回の工事では、過去約50年間の歳月で船底部分の痛みが激しかったことから、船全体を左右からの支柱で約３メートル持ち上げるという、大きな船では類例のない画期的な工法が採り入れられた。
喫水線付近は、全周にわたってドックの縁まで張り巡らされたガラスの屋根で、温室の如く覆われている。

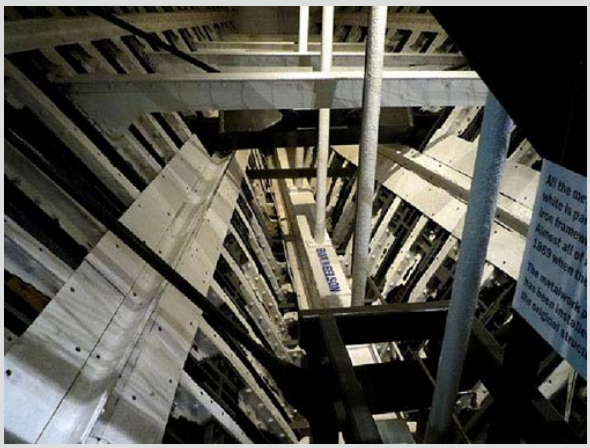
▲　回 廊
船首像を一回り出来る回廊が設けられている。

▲　船底部分
真下から見上げることが出来る本船は圧巻である。
ドックの両側には各種展示品が陳列されており、入口の船尾付近には「イーブンキールカフェ」と称する軽食、喫茶コーナーも設けられている。

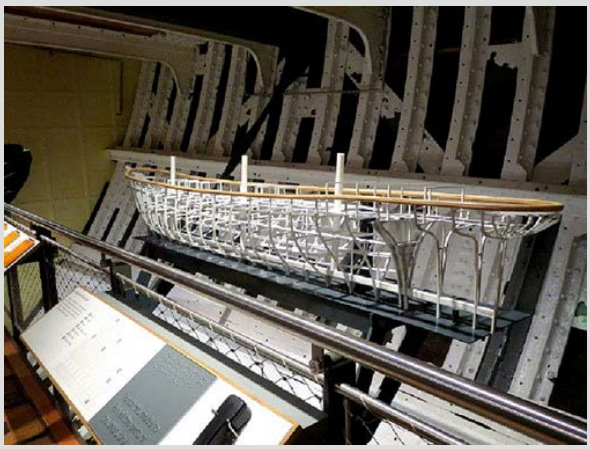
▲　ウィスキー『 CUTTY SARK 』
帆船時代「カティサーク」を利用して商売を行っていたベリー兄弟社が1923年、新種のウィスキーを販売するに当り、商品名にしたもので、1923年、1955年、2011年と３代にわたるボトルの変遷が、立派なショウケースに収まって展示されていた。

▲　**船内居住区**
船員室やサロンは従来どおりに復元

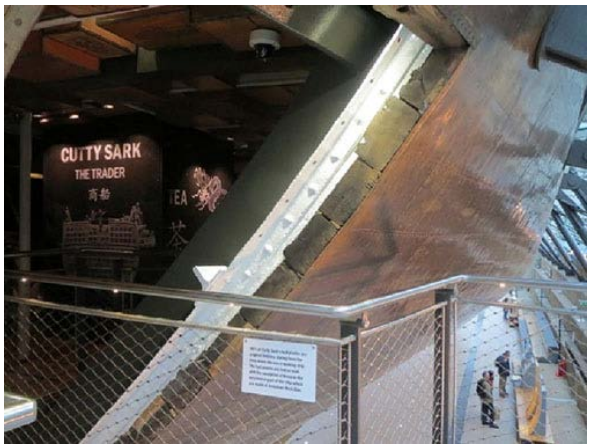
▲　**船倉内の展示場風景**
船内には見学者のための通路が整然と設けられている



▲　**船首船底付近の肋骨構造**



▲　**船体構造の全体模型**



▲　**船殻構造**
船内への入口部分には船殻構造が判るよう切り口が展示されている。外側から銅板、木材外板、肋骨

▲　**アッパーデッキのエレベーターハウス**
外観上帆船にはそぐわない異物であるが、バリアーフリーのご時世とあってはやむをえない。

▲　**メインデッキ**
メインデッキはきれいに整備され、帆走の操船シミュレーターや各種展示品などが並べられている。
船内のエレベーターも新設。

▲　**飼育小屋**
プープデッキの前には動物の飼育小屋。後方はジガーマスト。

▲　メインマスト

▲　フォアマスト

▲　フォクスルより上甲板後部

▲　後部プープデッキ前より上甲板前部

あとがき

海を志した我々にとって、帆船は一種の心の故郷であり、なかんずく帆船時代の最後を飾った快速船ティークリッパーには、ハイテク技術万能の現代に於いても、単なる科学だけでは理解出来ない、或は解決出来ないテクノロジーの何物かがあると確信している。

その故郷の原点である「カティサーク」が、改装工事中に火災に見舞われ、かなりの損害を被ったという事件が発生した。世界中の海運マンにとって正に晴天の霹靂の出来事であったが、その後の関係者の懸命の努力により、わずか５年で完全に修復が完了し、一般公開が再開されたというニュースが入り、これまた世間を喜ばせた。

今回の改装工事は、先の写真で説明したように、排水トン数2,100トン（現役時代）の船体を約３メートル持ち上げるという、他に類を見ない方式が採られているということで、非常に興味を持っており、是非見学したいと思っていたところであった。

訪船した際は、かなりゆっくり見学する時間はあったのだが、今振り返ると、まだまだ丹念に調査し、よりつぶさに撮影などをすれば良かったと悔やんでいるところである。

至らぬ点の多い写真、説明ではあるが、折角の機会なのでご披露させていただくことにした。何らかのお役にたてれば幸いである。

完

2013年11月　高島 記